

わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた

第179号

イザヤ 65:1

平成22年8月27日

イスラエルの子らよ。主があなたがた、すなわちわたしがエジプトの地から連れ上ったすべての氏族について言った、このことばを聞け。わたしは地上のすべての部族の中から、あなたがただけを選び出した。それゆえ、わたしはあなたがたのすべての咎をあなたがたに報いる。ふたりの者は、仲がよくないのに、いっしょに歩くだろうか。獅子は、獲物がないのに、森の中でほえるだろうか。若い獅子は、何も捕らえないのに、そのほら穴から叫ぶだろうか。鳥は、わながかけられないのに、地の鳥網にかかるだろうか。鳥網は、何も捕らえないのに、地からはね上がるだろうか。町では角笛が鳴ったら、民は驚かないだろうか。町にわざわいが起これば、それは主が下されるのではないだろうか。まことに、神である主は、そのはかりごとを、ご自分のしもべ、預言者たちに示さないでは、何事もなさない。獅子がほえる。だれが恐れないう。神である主が語られる。だれが預言しないであらう。

アモス書3：1－8

南ユダ王国テコアの住民アモスが、反逆の北イスラエル王国に預言者として送られたのは、神を忘れたイスラエルが軍事的に安泰、繁栄の最中にあると思いでいた八世紀 BCE の半ばでした。北イスラエル王国のヤロブアム二世の四十年間の治世はソロモンの時代に次ぐ国家太平を謳歌し、外国勢の侵略に脅かされることなく、むしろ南はエジプトと境を接し、北の国境はレバノン山とヘルモン山を結ぶ峠にまで領土を拡大することのできた繁栄の時代でした。当時の列強アッシリヤが九世紀 BCE 初頭にイスラエルの北の隣国シリヤを集中攻撃したことによりシリヤが衰退し、まずシリヤからの脅威がなくなり、次にアッシリヤ自体も国力を消耗したことにより戦闘力を失い、おかげでイスラエルは両国からの侵略に脅かされることがなくなったのでした。ヤロブアム王は国内の政治、経済発展に集中することができ、特にヨルダン川を越えた東部にまでイスラエルの領土を広げたことによって、アラビアへの通商路が開け、北部、東部への交易がもたらされたことが国家繁栄に結びついたのでした。指導者層から商人に至るまでかつてない繁栄におぼれ、社会の下層部に依然として根づいていた貧困問題を顧みる者はだれもおらず、根本的な問題が未解決のまま、人々ほうわべの繁栄に酔いしれていたのです。

ヤロブアム二世の治世までは何とか安泰を究めた北朝に、しかし彼の死を境に政治的崩壊が始まったことは、彼以降の王位継承者が暗殺によって目まぐるしく変わった悲惨な史実に如実に表われています。ヤロブアムの後継を継いだ息子ゼカリヤは六月、その後シャルムは一ヶ月、メナヘムは八年、ペカフヤは一年、ペカは四年、ホセアは八年間即位し、このホセア王のとき、721BCE に首都サマリヤがアッシリヤ勢により陥落し、北イスラエル王国はついに滅びたのでした。このようなイスラエル史の大転換期、北朝がまだ繁栄に酔いしれていた、この世的には崩壊のかげりの全くなかった 760~740BCE にアモスは、神の言葉を北朝に告げる預言のミニストリーに従事したのでした。国家の繁栄の最中に社会の享楽に染まることなく、時代を先取りして来るべき恐ろしい裁きの日を明確に捉えていたイザヤに代表される八世紀 BCE の預言者たちの洞察力の鋭さには驚くべきものがあります。民が預言者の警告を真剣に受けとめていたなら国家滅亡を防ぐことができたはずで、昔も今も変わらない人間の繰り返す愚かな過ちが二度と同じような悲劇を繰り返すことがないように、神は、律法、歴史、預言をヘブル語聖書に収められ、新約聖書には、キリストの福音を収められたのでした。そのことを、使徒ペテロは「私たちは、さらに確かな預言のみことばを持っています。夜明けとなって、明けの明星があなたがたの心の中に上るまでは、暗い所を照らすともしびとして、それに目を留めているとよいのです」(ペテロ第二 1:19) と語り、使徒パウロは「聖書はあなたに知恵を与えてキリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができます。聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です」(テモテ第二 3:15-16) と語って、神の御旨を知るには最後まで御言葉に目を留めて人生を全うしなければならないことを教えています。古代の人々の過ちから、今学ばなければ、私たちにも同じような滅びが迫っているのです。

預言者たちは平安な社会の直中で、国家にとっての真の危機は国際問題にあるのではなく、国民の社会的、道徳的、霊的状态にあることを民に警告してきました。アモスは、庶民、弱い者、貧しい者を踏み台に巨万の富を築き上げていた指導者たちに、彼らの神を恐れぬ暴虐が敵軍によるイスラエル侵略、国家滅亡の悲劇をもたらすことになる、神の裁きの宣告をしました。詐欺、賄賂、偽証、搾取等、不正、不法に加えて、指導者の悔い改めることのないおごり高ぶり、放縦、貪欲、冷酷が輪を掛けて、一見安泰に見えた社会は悪循環の一路を辿っており、いつ崩壊してもおかしくない状態にあったのでした。社会の中の富者と貧者との差が大きくなる一方であった背後には、富者優先の邪悪な国家体制、組織があったのでした。たとえば、^{かんぼつ}旱魃による不作の年は貧し

い小作人は、家族の食糧を得るために冬の間、富者、地主から穀物を借りなければなりませんでしたが、支払いには過重な利息が要求され、支払不能の場合には、高利貸しに土地、家の没収を余儀なくされたのでした。家から追い出されるような事態にはかろうじて至らなかった場合も、次に待っていたのは、借家、借地人として高い賃貸料を支払うか、あるいは、農地からの収穫高の大部分を地主に収めなければならないかで、どちらに転んでも貧者はますます貧しくなる以外に道はなかったのです。アモスが支配者層に「**あなたがたは貧しい者を踏みつけ、彼から穀物を横取りしている**」(アモス5:11, NIV) と叫んだのは、まさにそのような状態のことで、借金が全く払う手段がないほど多額に達した場合、子どもあるいは小作人自身(すなわち、一家の主)が奴隷に売られるという最悪の事態になることが見込まれての悪循環がまかり通っていたのです。このような邪悪な社会体制下では裁き司自身がすでに富者から賄賂を取っており、貧者に公義が行われることはまずなかったのです。

アモスの時代、同胞から借金の利息を取ってはならないとか、隣人から担保に取った上着はその人が夜の寒さから守られるように日没には必ず返さなければならない、といった神の憐れみの掟を回避するための手段として、宗教的理由を挙げるのがまかり通っていました。言い換えれば、宗教的な掟は世俗の掟に優先する、宗教行事は日常生活に優先するという人間的解釈がまかり通る社会では、担保に取った貧しい者の上着が宗教行事に必要な日没までに返さなくてもよいということになるのです。このような富者、強者優先の律法解釈とその実践は、八世紀 BCE までにしっかりイスラエルに定着していたのです。キリストは「**コルバン(神殿へのささげ物)**」を口実に、モーセの十戒の第五の戒め「父と母を敬え」の遵守を巧みに逃れている者たちを非難され「**自分たちが受け継いだ言い伝えによって、神のことばを空文にしています**」(マルコ7:13) と言われましたが、今日に至るまで指導者、宗教家たちの間でこのような律法の回避の正当化は公然と行われ続けているのです。

しかし義なる神がそのような暴虐、虐待、冒瀆を無視されるということはありません、神との契約関係に生きていたイスラエルの「**そむきの罪**」が暴かれ、処罰される裁きの日は間違いなく来なければならなかったのです。「**もし、あなたの兄弟が貧しくなり、あなたのもとで暮らしが立たなくなったなら、あなたは彼を在留異国人として扶養し、あなたのもとで彼が生活できるようにしなさい。彼から利息も利得も取らないようにしなさい。あなたの神を恐れなさい**」(レビ記25:35-36) はじめ多くの人間関係に関する配慮ある御命令は、神の掟がいかに愛と憐れみに満ちたものであったかを物語っています。しかしこのことは逆に、アモスの告発した当時の社会が人間の貪欲、邪悪、神冒瀆によっていかに神の掟からかけ離れてしまっていたか、忍耐の神の怒りがもはや頂点に達していたに違いないことを語っているのです。冒頭に引用した箇所「主が語られた言葉を聞け」とアモスが強制的に名指しているのは、神に選ばれ、愛され、特権に与ってきたイスラエルの民です。ここでアモスは、日常生活に見られる「**原因と結果の法則**」をイスラエルと契約関係にある神の行為を説明するために用いて、民に、この世の諸事象を通して知ることのできる神の警鐘に耳を傾け、「**そむきの罪**」を悔い改め、神ご自身と神の言葉に立ち返るようと呼びかけています。契約の民として自分たちに与えられた「**特権**」を罪に対する「**許可**」とはき違えて、厚顔にも罪を犯し続けていた当時の人々にアモスは、まず、因果関係のきずなを説明する「**原因と結果の法則**」が無縁なものを分かちように、神の道を歩まない者は神から引き離されることを訴えます。次に自然界からの二つの事象を例に挙げ、捕食者「**獅子**」がほえるのは獲物を見つけたからであり、被食者「**鳥**」が捕食されるのはわなが敷かれたからであるとその因果関係を強調し、略奪者接近の警報に略奪される民が震えあがるのは、同じ法則によることを訴えます。それは近隣諸国との対外的な問題の域を越えて、町全体を恐怖に陥れるすべての災いの背後に略奪者なる神がおられるからであると、アモスは、世の中の諸事象で神の御旨とは無縁に偶然に起こることは何もないこと、諸事象の背後に神が関わっておられることを人々に強く訴えたのでした。

アモスのこの警告は時代を超えた真理で、今日の私たちに関わる重大なメッセージです。すべてを支配しておられる神は自然現象、天災、人災を含めたこの世の事象を通して一人ひとりに語りかけておられます。私たちの周りでは今日、見通しの立たない経済、金融危機、世界的不況、世界的な天候異常、特に今年の猛暑、局地的な大洪水と旱魃、百年ぶりの怪奇現象といわれる太陽の黒点異常、史上最悪の環境災害を招き、一帯を血の海と化したメキシコ湾 BP 原油流出事故、降りかかる火山灰でヨーロッパの航空機関が完全に麻痺し、各業界に及んだ余波で大自然に対する人間の無力さを知らされたアイスランドの火山爆発、世界的な食糧不足と水不足、離婚、片親家庭の増加と身体的、性的、心理的虐待で特徴づけられる家庭崩壊、核戦争の脅威……に加えて、昨今のニュースは、人間の罪が引き起こす諸問題、不道德、性犯罪、殺人、虐待、(アルコール、薬物、たばこ) 各種依存症、不正、賄賂、詐欺、搾取、貪欲に満ちています。聖書を通して神がいかに真実の愛「**憐れみ**」と寛容に満ちた方であるかが分かりますが、私たちが神の警告を無視するとき災いが下されます。災いを通して人々が救われることも神の御旨だからです。しかし裁きを通して完全に滅びる者もいることを私たちは銘記しなければなりません。昨今、聖書の記述が預言の詳細に至るまで実に正確であることが科学的、考古学的発見によって立証されてきています。この特権に与っている今日、この聖書が紛れもなく唯一真の神の言葉であることを信じなければ、アモスが警告を与え始めてほぼ四十年後に滅びた北イスラエル王国のように、私たちも滅びることになるのです。